

郷土研究會資料 昭和五十四年七月二十三日

第九十六回

史跡めぐり資料

(皇居東御苑將力塚)

越谷市郷土研究会

日置 泉一

将門塚

大手門を濠に沿つて北側内堀りの労働省別館
の牛歩を右折すると長期信用銀行や三井生命
ビルがそびえてゐる。平将門の首塚はそのビル
の谷間にある。将門は桓武天皇の曾孫高望王
(上総介従五位下、葛原親王の嫡子で平氏の子を
賜つた人)の孫で、鎮守府將軍良將の第三子で、^{九〇ニ}連
妻三年に生れる。父祖以来の伝統的勢力をつい
で下総国猿島を本拠として勢力を振るつた。承
平五年常陸国の豪族源護の子と争ひをおこし

護父子及び、こ小を助け、伯父の平国香と戦つ
 て国香を殺した。こうして将門は平氏一内に対
 する反逆者として、良兼、良正、国香の子貞盛らの
 攻撃をうけたが、常陸下野下総等の国に彼らと
 破り、南関東に益々その威を振るつた。常陸守藤
 原維幾（ニホキ）の追補をうけた藤原玄明（ハコノキ）を助け、常陸
 国府を焼き討ちにし、維幾を捕え、下野上野の国
 府を占領、関東の大半をおさえて自ら新皇と称
 し、猿島郡石井郷に王城を営み、文武百官を任じ
 一統を肉取の国司に、た又慶三年（九四〇）下総、筑波谷で

平貞盛、藤原秀郷の大軍の決戦で戦死した将門
 の首は京へ送られ、東洞院の木に架けられ、獄
 内になつたが、ある夜空を飛び、武蔵国豊島郡柴
 崎村(千代田区大手町)へ落ちたといふ。この首を
 葬つたのが首塚である。嘉元三年二世遊行上人
 真教が東行ありと立ち寄り、て荒廢して、この
 を復興せよと日輪寺を建立し、塚の前に祠堂を
 建て、将門の霊を祭つた。それが神由明神であ
 る。神由明神は駿河台へ移り、さらに湯島台の現
 在地に移轉した。日輪寺は家康入府のとき淺草

徳川市史編さん委員会

()
に移された。将内の一女は、平良文の三男恒明の
古忠頼と改名と結婚した。その為千葉稔父、相馬
豊島、畠山、河越、江戸、葛西、波谷、三田、平田の諸氏は
みな将内の後裔と称している。

皇居東御苑

渡り櫓あいらの復元す。新装成った大手門は皇居東
地区庭園の正門となった。この門は伊達政宗の
構築といわれる。徳川氏の外様大名制圧の一ツ
といわれる。その費用は莫大なものであ
った。記録によると政宗は人夫四十二万三千余

人と黄金二十六百七十六枚をつかつたといふ。この形式の内は橋をわらった正面に冠木内形式の高麗があり、その両側は頌文の高塙になつていて入口が狭い。高麗をくぐると長形の高塙がある。この高塙は正面と左手は石垣と堀たさえがら水右に曲ると渡槽内があり、二水をくぐらなると城内に入水なつ。この二段構えの内は阿彌の上に大きな利奥をもつてゐる。攻撃軍は一度は押し入水ないししがも中は入ると三

この城は...

一才から射すくめら水るわけである。旧本丸に向
 かつて行くと右手が旧二の丸回遊式庭園は小
 堀遠州の作庭とつたえら水廻りである。左
 かい向放置さ水といたが東地区を公開するに
 あらつて園池の名残りもたよりには復元した。
 旧本丸正内西才とそびえるのが富士見櫓であ
 る。三代將軍家光の時代につくら水たといふ。
 明暦の大火で焼失、二年後再建。関東大震災で火
 被害をうけ解体修理をした。天守閣は慶長十二
 年正月に完成した工事に当つたの付中井大和

江戸時代
 徳川家康
 徳川家光

守甲良豊後守である。天守櫓は五層下地下一階
であつた。二の天守櫓は明暦の大火で焼失した
のでその詳細はわからなかつた。石垣の下から屋
根の上の金の籠まで約五十一米もあつたとい
ふ。まゝに日本最大の規模であつたようである。
一六五七
明暦の三年大火は振袖火事と呼ばれたもので
天守櫓の二層目から火を吸ひこみ焼け落ちた。本
丸、二の丸等主要建造物はすべて焼失した。幸う
じて西丸御殿が残つた。將軍家綱は天守櫓再建
にとりかかり、加賀藩は石垣の復旧を命じた。

金明水。

保科正之らの反対で直邊の水をかつた。御影石
 で築造された東西約四十一米南北約四十五米
 の石垣台地が天守閣の跡である。本丸御殿は表
 中奥。大奥の三つに区分されてゐた。東側一帯の
 空地がそれである。松之廊下は西側植え込みの
 中に石碑が立つてゐる。そのほかには
 汐見坂。白鳥塚。梅林坂。天神塚。都道府県の本。諏訪
 の茶屋。同心番所。百人番所。大番所など。松田二重
 櫓。江戸城に残つてゐる隅櫓。富士見櫓。本丸に残
 る三重櫓で江戸城本丸の壮麗なしのぶすか

松田二重櫓

となつてゐる太田道灌が任ふを静勝軒のあつ
た所は、このへんであろうといわれる。

参考資料

千代田区史跡と観光

東京厂史散歩

東京の伝説

東京史学会会報